



「父の遺言です」と江尻敬さん(右)が寄贈 (7.9)

日本記者クラブ会報

第342号
1998年
(平成10年)
8月10日発行

東京都千代田区内幸町二ノ二ノ一
日本プレスセンタービル100-0011
◎社団法人 日本記者クラブ
☎〇三二二五〇三二二七二二(代)

故江尻進氏からクラブ賞基金 施設貸し出しで活性化目指す

元日本新聞協会専務理事の故江尻進さんのご長男、江尻敬さんからこのほど、日本記者クラブ賞基金として五十万円が寄贈されました。敬さんによりますと、江尻さ

んが残された遺書に、不動産処分
のさい、クラブ賞基金に寄贈する
よう書かれていたそうです。今年
夏の三回忌を前に整理ができ、遺
言を実行されたとのことでした。

江尻さんは、八三年に同専務理
事を辞められた時、すでに百万円
を寄贈されています。改めて感謝
申し上げ、ご冥福をお祈りします。

また、日銀副総裁になられた元
時事通信社の『藤原弥さんを励
ます会』からも、会の残金九万二
千余円の預託がありました。ご好
意に感謝し、これも同基金に組み
込ませていただきました。

さて、クラブ活性化策のうち、
若手の現役記者に親近感を持って

もらうための①三十五歳未満会費
制度の新設②取材証の使用条件の
変更―は、先月号で説明済みです。
残り二項目を説明します。

【賛助会員入会の促進】企業・団
体の法人賛助会員は過去十二年
間、新規の入会を抑制してしまし
た。この間、約二十社が退会し、
これによる予算への影響は年間千
二百万円にのぼっています。この
ため、定款の基準に合う法人を厳
選して減少分程度の補充が図れる
よう、緩和していただきました。

同時に、当クラブが創立三十周
年を迎える来年十一月一日までの
間、新聞・通信・放送各社が関係
する系列企業等の入会には、五十
万円の入会金を免除し、一般の企
業等の場合も半額としました。

【発表の場としての機能促進】賛
助会員はもとより非会員でも、そ
れが記者発表なら、施設の利用を
認めよう、というものです。

賛助会員の施設利用はあまり多
くありません。もっと利用しても
らうため、賛助会員が行う記者発
表等の部屋代を半額にしました。

問題は非会員の利用です。この
ところホテルを利用する外資系企
業や国内企業の記者発表がかなり
行われています。こうした企業に
クラブ施設の利用を呼びかけるも
のです。企業にとっても、割高な
ホテルよりステータスのある当ク
ラブの利用を願っているのです。

ただし、非会員には歯止めが必
要です。少なくともマルチ商法ま
がいや、あやしげな団体の宣伝に
利用されることは許されません。
このため、基本会員の推薦を前提
に申し込みを受けつけ、内容を検
討のうえ判断することになりました。

この二項目は会費収入落ち込み
をカバーするための増収策です。
しかし、将来の出先クラブの変化
や多様化する民間ニュースへの対
応なども視野に入れて考慮したつ
もりです。リノベーション終了後
の九月一日実施です。詳しくは事
務局にお問い合わせください。

(専務理事 那部 吉正)

ク ラ ブ ゲ ス ト

セルゲイ・キリエンコ ロシア首相

三十分という限られた時間でどれだけ効率的にニュースになる答えを引き出すことができるか。ロシアのセルゲイ・キリエンコ首相の記者会見では、この難問を前に事務局の石川さんと知恵を絞った。

何しろ、ロシア人はいったんしゃべり出すと止まらないし、前置きに公式見解を長々と講釈する。

だが、キリエンコさんはこうしたロシア人に対する私の考えを一変させた。事前の打ち合わせで、時間がないので、直ちに一間一答を始めたといとお願ひしたら、あっさりOKが

出た。実は、大使館で冒頭声明を用意していたのだが、これを全く無視してボツにしてしまった。

会見でも答えはおおむね短かつたし、的はずさない。三十五歳の若さを感じさせない堂々とした会見ぶりだった。

ロシアでいわゆる西側流の記者会見が定着したのは、それほど古いことではない。私が最初にモスクワで勤務した七〇年代後半、共産党や政府の首脳たちは、西側のジャーナリストはもちろん、自国の記者団を相手にさえ会見することなど全く思ひもしなかった。

それが徐々に変わってきたのは、ゴルバチョフがベレストロイカを開始してからで、彼は米ソ首脳会談などで積極的に記者会見に応じ、クレムリンの立場を宣伝した。

今でも記憶に新しいのは、アイスランドのレイキャビクで開かれたレーガンとの首脳会談が決裂したあとのゴルバチョフの記者会見だ。レーガ

ンがさつと帰国したのと対照的に、同行したソ連代表団を壇上に従えて、全世界から集まった大記者団を相手に延々と米側の主張の不当性を激しく批判した。

エリツィン大統領の会見にも何度か出た。彼の場合も、ゴルバチョフと同様、激しいが、時々打ち合わせにない失言をしたり、原稿にうまく引用できる例え話をしたりするので、記事にしやすい指導者かもしれない。こうした旧世代に比べると、キリエンコさんはまさに新世代だ。

だが、最後にあと一間で会見を終了しますと言うと、二点ほどつけ加えたいと耳打ちし、あらためてロシア政府の立場をしっかりとPRしていた。

体制が変わり、世代交代が進んでも、言うべきことは忘れずに主張するロシア人の抜け目なさには変わらぬ。ロシアとのつき合いはやはり一筋縄ではいかない。

読売新聞編集局次長

小島 敦

7・14(火) 記者会見 司会 小島敦
島教員 通訳 米原万里 柴田友子 出席 256人

▼収入に見合った生活が前提

「経営困難に陥った石油会社『ノルシ・オイル』を短期に建て直したことがエリツィン大統領に認められ、首相に特進したと聞いています。どんな秘策を用いたのですか」との質問に、若いキリエンコ首相は明快に以下のように。

「昨年十一月、燃料・エネルギー相として入閣した際、チエルノムイルジン首相からその工場での仕事を聞かれ、一時間ほど夢中になって話しました。そうしたら、工場がうまくいった通りのことを国のレベルでもやってくれと頼まれました。実際に閣僚を経験して、国全体の問題は工場の問題と同じだと実感しました。つまり、双方とも収入に見合った生活をしていないということなんです。中長期的展望にたったバランスシート作りが必要なのは、国も工場も同じ。そのためには社内の意思確認が必要です。従業員は仕事の目的や課題を忘れてしまうことがあるからです。仕事をきちんとやることで、彼らの生活を保証していく。これは、国の運営にも通じるものです」

ワインと花の丘一見学会— サントリー山梨ワイナリー



常温18度の樽専用の貯蔵庫。一樽でポトル五百本分がとれる。堀江敬陸会員撮影

七月二十二日朝九時、富士急の大聖バスは四十人余りの参加者に乗せ、雨もよいのプレスセンター前を出発した。数日前ラウンジでは「俺起きれるかな」なんておっしやっていた先輩諸氏のお早いお着き、お早い居眠り。

談合坂を過ぎ甲府盆地に入ると暗れてきたが、暑い。昼前、目的のワイナリー着、村上所長の案内でワイン醸造の説明を受ける。十八度に設定されたワインセラーで一息ついた後、バスで百五十ヘクタールの園内見学。棚作りの白ブドウ畑は房の食べごろが分かるので、生食用に発達した。垣根風に立ち上げた畑は果実に陽が当たり、赤ブドウの色を鮮明にするようだ。富士山、南アルプス、

甲斐駒、八ヶ岳に囲まれた標高六百メートルのブドウ畑が続く。

四月オーブンのワインテラスへ。早立ちの空腹と喉の渇き。試飲のワインが胃の腑に沁みる。ワインは赤白二種類ずつ。市販で二千円から三千五百円のもの。値段を聞いた高い方がおいしくなつた。何だか情けない。

嗜好品だから人それぞれの好みがあつていい。来日した本場ホルドールの専門家は「その土地にあつたワインをその土地で飲むのが一番」と持ち上げて帰つたそうだ。フランス人らしいニクイほめ言葉だ。

いい気分になると何か言い出すのが新聞記者？。帰路、急ぎよ、山梨県立美術館で問題のミレー「落ち穂拾い」を見る。バルビゾン派の歴史をたどる展示意思がいい。新宿までの二時間、年増ガイド嬢の演歌熱唱は圧巻であつた。

ちなみに、参加者選出は立会人をたて、厳正に行われたそうだ。個人D会員（日経・テレビ東京出身）

大留 明夫

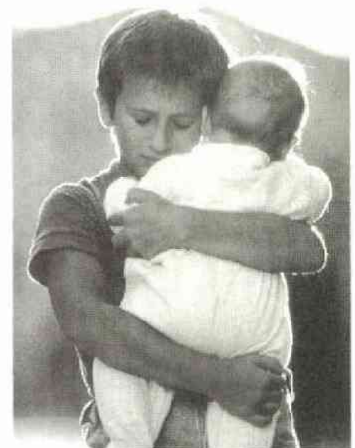
試写会

戦争、紛争ものの映画製作が難しいのは、その取材と同様である。どちら側からテーマを見据えるか、どこを根拠地とするかである程度視点が決まってしまう。「ランボー」ならともかく、シリアスに描こうとすればするほど困難な問題が出てくる。

ボスニア・ヘルツェゴビナのように、セルビア、クロアチア、イスラム三民族入り乱れた内戦では、家を焼かれ、生地を追われ、難民となつた悲惨な話ほどどちら側からもほぼ同様の話が聞けるだろう。この映画が成功したのは、当事者からの視点を避け、第三者、サラエボを訪れた外国人記者の話にしたこと、しかも実話に基づいていることにある。

英ITNテレビのスター記者、マイケル・ニコルソンのボスニア体験記で、孤児院にいた少女をロンドンに帯同し養女とする話である。原

ウエルカム・トゥ・サラエボ



作は英国でベストセラーとなつた。

武器一つ持たない市民を狙う狙撃兵。避難する国連のバスからイスラム系の子どもを降ろす民族グループ。ともすれば、戦争の悲惨さを告発する形になりがちなテーマを、英国気鋭のウインター・ボトム監督は感傷を排して事実として畳みかける。

デイトン合意後のサラエボを含むボスニア、クロアチアなどのロケ。随所に挿入された実写フィルムが現実感を高めている。冷戦後の今、世界で何がおきているか。平和ほけた日本の若者に見てもらいたい。読売新聞編集委員 永井 清陽

書いた話 書かなかった話

「スカルノ亡命？」——
インドネシア流を追った日々

阿部 義正

るようだが……。その背後にスハルト将軍の困ったような顔がチラリ見えた。

私は慌てた。その後の長い記者生活でも、これほど気が動転したことは少ない。急いで

電話に走り寄り、支局の助手に怒鳴った。「大至急、東京に連絡して、大統領は健在だと伝えてくれ」。

あとで知ったことだが、その時、東京本社では夕刊早版が刷り始められていた。「スカルノ大統領ついに国外へ」の一面トップ記事、二、三面にはスカルノ時代の終幕とスハルト新政権の課題という特集記事が組み込まれていた。その大半は、数日前に人に託して本社に送ってあった予定稿だった。

外報部デスクがなぜ大胆に「亡命」に踏み切ったか。あとで調べてみると、ライバル各紙が数日前から、その可能性が高いと書いて

いたこと、日本政府筋も、東京に米る可能性があることをにおわせていたことが「もう時間の問題」という気分にかけていたらしい。ところが現地の私からは、煮え切らない情報しか入ってこない。「あの若僧、ちゃんと取材してんのか」とベテラン記者たちがいらついたとしても不思議はない。当の私は怪しげな情報やうわさ話の中で、インドネシア流の権力闘争の実態がはつきりつかめず、毎日イライラしていた。

ところが七日の夜、もつとも信頼していた筋から電話が入った。大統領が明日にも、国外に出る可能性が強まった。気をつけろという内容だった。夜も遅く、別の筋に確認をとる方法もない。翌日になれば、新任の日本駐インドネシア大使の信任状奉呈式が予定されていたので、それまで待っても遅くはない、と思ったが、このニュースソースは信頼度が極めて高かったから、一応情報として伝えておこう。ウイスキーをなめながら、

「三十二年のスハルト独裁に幕

——この五月、久しぶりに国際ニュースのトップを賑わせたインドネシア政情に、私は年甲斐もなく興奮していた。そこへ後輩記者から珍しく電話がかかった。「スハルト一族が国外に亡命するとうわわさが流れているんですが、どう思いますか。私は大いにあり得る」と感じているんですが……」「いや、あの国はそういう常識が通らない土地柄だからね」。

歯切れの悪い答えしかできなかつた。そして、三十年前の体験を苦々しく思い出していた。

一九六七年二月八日の朝、初陣

のジャカルタ特派員だった私は、睡眠不足と神経過敏の状態で、ムルデカ宮殿に駆け込んだ。スカルノ大統領は果たして出てくるのか。それとも密かに海外に出ているのか。顔なじみの各社の特派員も続々と集まってきて、情報の交換やハラの探り合いを始めた。やがて、めっきりシワの数はふえたが相変わらず精かな風貌の大統領が軍人や大臣に囲まれて出てきた。私たちを見るなり、皮肉な口調で言った。「日本の記者たちだな。スカルノ大統領は、ご覧のように健在だよ。亡命するなどと書き立てている記者がこの中にい

暗号入りの原稿をタイプライターで打ち、朝一番で電報局へ飛んでいった。

当時のインドネシアは、取材も難しいが送稿はさらに大変だった。方法は三つ。

一つは原稿をローマ字で書き、これに検閲用の英語の内容説明をつけて電報局に持って行く。受け付けてはくれても、なかなかテレックスで打電してくれない係員への袖の下も時には必要になる。

二つ目は国際電話。つながるとはつながるが、待ち時間不明。やっと通じてても、英語でしゃべらないと切られる。検閲されているからで、スカルノが…などと言うものなら、すぐガチャン。結局、緊急事態に備えて、本社外報部との間で簡単な暗号を作っておいた。もう正確には思い出せないが、大統領「古い友人」、スハルト將軍「歯医者」など。

三つ目の方法は「人間伝書鳩」。シンガポール、バンコク、東京へ出発する旅行者を空港かホテルで

つかまえ、原稿を運んでもらうのだ。日本人ならたいい「いや大変だね。確かに貴社の支局にちゃんと手渡すよ。頑張ってる」ということになるが、外国人に頼む時はリスクが増す。ちょっとした品物かチップを渡してもすぐには届かず、地球中をどう動いたのか三〜四週間後にやっと到着、もちろん、もう後の祭りといったケースも珍しくなかった。

二年後、バンコク特派員に赴任したが、電報局から自分でテレックスが打て、交信できるのが本当にうれしかったのを覚えている。

「スカルノ亡命特集」は早版だけでボツ、私のクビはかろうじてつなごうとした。数カ月後帰国して、外報部長に「どのような処分でも」と言ったら、「いや、編集局長は笑っていたよ。若いときは勇み足もあるさ、とね。」

スカルノについて、もう一つ書かなかった話がある。六六年の夏、社の先輩が中国を取材した後ジャカルタに来て、どうしてもスカル

ノ大統領に会いたいという。デビ夫人にある筋から頼んで、日曜日の夕方夫人の私邸で会えることになった。待つことしばし、突然現れた大統領を見て驚いた。穴のあいた半袖シャツにサンダルを突っかけ、愛用の帽子もかぶらず、はげ頭丸出し。

通訳がないので、私が下手な英語で大汗をかく羽目になったが、文化大革命で揺れる中国についてコメントを求めても答えず、「中国の三民主義とわが国のパンチャシラ（五原則）は基本的に同じだ」と何度も繰り返していた。

二年半後にインドネシアの土地で、幽閉のような形で病没するまで、彼はがんとして中国批判をしなかつたが、私はあの日のスカルノの口調から、その親中国感情の強さを痛いほど感じ取っていた。

この話はこれで終わらない。夜も十時を過ぎていたのだろうか。スカルノはつと立ち上がった。わたわらのデビ夫人に言った。「みんなおなかをすかしているだろう。タン

ジョンプリオクにうまいサテ（焼き鳥）屋がある。すぐに食べに行こう」「いや、もう遅いし、日曜日だから、ムリじゃないの」と夫人は言ったが、大統領はスタスタと車の方に歩いてしまった。それからサイレンを鳴らすジープ数台を先導に、突っ走る大統領車をわれわれのボロ車が必死に追いかける深夜のカーチェイスになった。ようやく着いた港は、小雨の中、ガランとして人影もまばら。デビ夫人の心配した通り、サテの屋台はみんな帰っていた。

さてどうするのかと、見守っているとスカルノは「仕方ないか。じゃ帰ろう」とさっさと車に乗り込んだ。その後ろ姿が、権力を失った元英雄のさびしさをまざまざと見せつけていた。

あべ・よしまき会員 一九三三年生まれ
五八年読売新聞入社 ジャカルタ バン
コク特派員 アジア総局長 外報部長
編集局長 同総務 制作局長を務める
現在 読売旅行代表取締役社長

書いた話

書かなかった話

七月十二日の参院選投票日。

刻々と伝えられる開票結果は、はっきり言って予想を超えるものだった。橋本龍太郎首相（当時）の退陣による激動政変の幕開けだ。

自民党内の従来の派閥力学から言えば、旧小渕派が推し、旧宮沢派、旧渡辺両派の大半がついたことで「小渕恵三総裁」が順当だ。しかし、参院選大敗で自民党内は混乱を極めていた。若手議員は「小渕氏では総選挙を戦えない。従来通りの選び方ではだめだ」と突き上げ、先がなかなか見えてこない。「これまでと同じようにはいかない」という確信はあったが、それでも梶山静六前官房長官が出馬するのを読み切れなかった。

「梶山さんが立つ」と言っています」。十五日夜、衛藤征士郎、江藤隆美、麻生太郎の各氏ら反執行部派の議員が東京・赤坂の料亭で会合した。出席者の一人が玄關に姿をみせたときにこう言った――と、現場で取材している記者から自民党本部にある平河クラブに電話が入った。

この日の朝、旧小渕派が幹部会

ワーキング

プレス

——自民党総裁選——

車ナンバー頼りに 料亭街・駐車場を

▶羽成哲郎
(産経新聞社)

政治原稿は、こうした総合的な判断が要求されると同時に、事実関係の丹念な確認が必要だ。先にあげた反執行部派の集まりが開かれていたころは、夜の会合が花盛り。政治家は秘密にしたいのだが、こちらは突き止めたい。

そこでどうするか。政治家の車のナンバーをひかえたりリストを手にとり若手記者が赤坂の料亭街や国会近くのホテルの駐車場を歩き回る。政治家の車を見つけたら、互いに連絡をとり、ひたすら待つ。

これでヒットしたのが、十六日夜の森喜朗総務会長（当時）と小泉純一郎厚相（同）の会談。小泉氏擁立が決まったことを察知できた。これには日ごろから政治家の乗る車のナンバーをひかえておくという地道な作業が必要になる。政治記者は政治家と癒着している――という批判も聞こえてくる。しかし、実態は地味な作業の積み重ねでもある。

政治家も政局になると、人間味があふれてくる。普段は政策課題しか話さない現職閣僚（当時）が「おれには政策よりこういう票読



自宅前で記者団に囲まれる小渕新総裁

みの方があっているんだよな」と生き生きとしていたり、深夜に夜回りにいった先で、最初はインタ―ホン越しだったのが、「じゃあ、少しだけだぞ」と言って上げてくれたり。一日中追いかけていた中堅議員が「ちよつと時間があいたから映画でも見よう」と誘ってきたこともあった。総裁選という「戦争」の中で、こうした「人間同士の触れ合い」ができるのが政治記者の醍醐味の一つ。だからこそ、睡眠不足や暑さの中での厳しい取材にも耐えられる。

はなり・てつろう 一九八五年入社 政治
部で自民党 首相官邸 外務省などを担当

山歩きが好きだ。これまでも休日などを利用して青森県内の有名無名の山々に登ってきたが、十年ほど前から、青森県の山を紹介する記事を書きたいものだ、と考えるようになった。

目標は、きりのいいところで百山。何より、自分で百の山に登ってみたかった。青森県の山を百山紹介した本はこれまで出版されていない。自分が知りたいことは、読者も知りたいに違いない。そう確信して、上司に山の仕事をやらせてくれるよう希望を出した。

それがかなったのが昨年四月の異動時。上司から「百十山登り、その記事を書いてほしい」と言われた。百十とは、東奥日報創刊百十周年にかけたものだ。給料をもらって趣味の山に登る——同僚には申し訳ないが、にわか登山家になってしまった。こうして百十周年記念企画「あおもり110山」が昨年八月から始まった。一週間に一本、約二年間の連載である。折しも中高年の登山ブーム。ご多分に漏れず、青森県の山も中高年であふれている。が、彼らが登

山対象にしているのは八甲田、岩木山など知名度の高い山ばかり。いい山はもつとありますよ——そのような気持ちで準備に取りかかった。連載のコンセプトは任された。一応、各出版社や地方紙が出している山の本に目を通してみた。登

むことだった。取材を始めてみて、みんなに注目されていない山でも、意外なほど地元の人々と密接にかかわっており、奥深く広がりを持っていることに驚かされた。薪炭材を採ってきたが石油スト

列島報告

— 青 森 —

創刊110周年企画

古里の山を巡る旅

村 上 義千代

(東奥日報社 編集局付部長)

山ガイドや山の紹介に力点を置いているものがほとんどで、地元山岳会に執筆・撮影を依頼しているケースが多かった。どうせやるなら、どこでもやっていない路線でやりたい。こうして考えたのが、「山と人々とのかわり」にスポットを当て、自分の足で山頂を踏

薪炭材を採ってきたが石油スト
ーブになってから木が不要になり
様相が変わった山、
牛馬の餌の採草地だ
ったが農業の動力が
耕運機に置き換わっ
たため草山から森に
変わった山、牛肉自
由化の波を受け利用
農家がほとんどいな
くなってしまった牧
場の山：。
さらには、漁師が
網を仕掛けるときの
目印にしている山、採石で原型を
とどめない山、生態系が変わりチ
ョウがいなくなった山、第二次世
界大戦の遺構が残る山、ロボット
雨量計のある山、信仰の山、自然
保護の余波で猟師が締め出された
山：。
リストアップした百十の山々に

は、これまで知られていなかった数々の物語があった。いつの間にか、山の取材よりも人の取材に力点を置くようになっていた。とはいっても、基本は山。登山、撮影、取材、執筆はわたし一人。二泊三日かかる雪山登山に悪天候のため二回失敗、大いに焦り暗たんとしたが、三回目ようやく山頂を踏み撮影できた山もある。現在の進行状況は、登山に例えるならちょうど五合目。ふるさとの山に登り、人々の知られざる物語を掘り起こす旅は、あと一年続く。

(むらかみ・よしちよ)



毎週土曜日、カラー面の企画が目々ひく

総会記念講演 1998年5月25日(月)

日本と ヨーロッパのはざままで

岸 恵子

(女優・国連人口基金親善大使)

パリと日本を往復しながら女優として、テレビのキャスターやリポーター、そしてエッセイストとして活躍する岸さん。96年には、日本人として初めて国連人口基金親善大使にも任命されました。大使として訪れたベトナムやフィリピンでの経験、パリでの人種差別反対運動のリーダーやホームレスとの交友——心に響いたエピソードを織り交ぜながら、アジアで、フランスで考えたことなどを表情豊かに語ってくれました。"日本"を意識しながら、より広い、たおやかな視野で生きる岸さんがそこにいました。

りました。地球規模で考えると、人口がどんどん増えていってしまっているわけです。いわゆる発展途上国、貧しい国々で子供がたくさん生まれる。その子供をうまく育てることができない。そういう国の人たちに、国連がお金を出し、いろいろな家族計画を広めて手助けする。つまり、子供は望んで生む、欲しいときに生む、そしてなるべく少なく生んで大事に育てる。そういうスローガンの下に、国連人口基金の親善大使というお役目をおおせつかったわけです。

望むときに生むといっても、望んでも生めなかった私がその仕事をやらせていただくとは何とも皮肉なこと、そして力のあることです。でもお引き受けしたからには、とってやってみるわけです。

そして、そのこともあって、今日ここに、皆さまにお話するチャンスをいただくことになりました。

○：「百円募金」の呼びかけに

私はこのごろ、ほとんどテレビにも出ません。ここにいらっしやる皆さんは、私のことをかすかに知ってくださっているかもしれないけれども、若い人は「あの人だれ」という人が多いでしょう。お年の方は「あつ岸恵子、まだ生きていたのか」という人もいらっしやるかと思えます。

私の話は、あちこちに飛び散ってしまっていますので、終わってから「あつ、一番肝心なことを言い忘れた」ということにならないために、あつることから話させていただきます。

そのプロローグとしまして――。

私は子供のころから一つだけ、とても欲しいものがあつたのです。それは、お兄さんです。一人っ子であることの寂しさに耐えられなくて、どうして私には兄弟がいらないのかと思つて

いました。結婚したときは、子供は少なくとも二人は欲しいと思つていましたのに、一人しか恵まれず、私の結婚した相手も一人っ子。ですので、ずっと一人と一人が続きました。私の夢とあこがれは大家族。おじいさん、おばあさんがいて、お父さん、お母さんがいて、子供がズラーツといる。それが夢だったわけです。

そんな私が、皮肉なことに、九六年から国連人口基金の親善大使というお役目をおおせつか

私は好きな仕事だけをやるという、勝手な仕事の仕方をさせていただいています。そういう私にとって戒めになりましたのは、テレビに出ないということ、つまり集金力がないということなんですね。国連のお手伝いもなかなかできない。

生まれ故郷の横浜のテレビ神奈川で「岸恵子の時代気分」という、ちょっといい対談番組を五年間もやらせていただいています。これは全国ネットではありません。それでユニセフの親善大使を十年もなされて、何十億というお金を集められて猷身的に働いていらっしゃる黒柳徹子さんの「徹子の部屋」という番組に出させていただきました。そして「百円募金」——これは私ではなく娘のアイデアだったのですが——これを提唱しましたら、テレビの力は本当にものすごいですね。たくさんの方々が募金をよせてくださったのです。

ところが、そこで私は、大変なくじりをしました。一、「百円募金」と言えばよかったのですが、ただ単に「百円募金」と言ってしまうために、皆さま生まじめに、本当に百円の寄付をしてくださるのです。ご夫婦で毎月百円ずつしてくださる方もいます。うれしいです。文句を言えた義理ではありません。けれども、百円送ってくださるのに、百五円の手数料がかかるのです（笑）。

ですから、「それだったら千円でもいいのよ」

と。今ごろになって「あつ、しまったな」と思っているのですが、遅すぎる後悔でした。

○：ヴェトナム人の豊かさゆとり

私の最初のミッションはヴェトナムでした。ヴェトナムは初めてだったのですが、大変感動しました。長い長い戦争をくぐり抜け、そして、あんなに苛酷な踏みにじられ方をしてきた人たちが、どれほどしなやかに、強く、明るく、いまを生きているかを実感しました。

そこでは、私みたいなものが人口基金の親善大使だなどと言って演説をするまでもないので。兄弟姉妹が大勢いたために、満足に食べることもできなかった人たちが、戦車の陰に隠れて銃を持っていた少女少女が、いま三十五、六歳になって今日のヴェトナムを担っているわけですから、「二人っ子政策」というのをきちんとやっているのです。ヴェトナムでいろいろと圧倒されたことがあるのですが、その時のエピソード

ドを二つだけお話しします。

ハノイから悪道を五、六時間車で行ったところに、ハバックという村があります。大変に貧しい農村ですが、家族計画がすごくしっかりしている。国連からの支援金を、あれほどうまく利用している人たちもまれなのではないかと思うほど、すばらしくきちんとしていました。

そのこの畑の中にぼつと建っている公民館に行きまして、驚いたのです。まず水道がない。電気はありません。裸電球が一つ。そこが、いわゆるお産をする部屋だったのです。そして、赤ちゃんを初めて入れるところは、ドアもない。吹きさらしの部屋。そこにベッドが置いてあり、そのベッドにはゴザしか敷いていない。熱いお湯なんかはもちろんないのではないのでしょうか。

「新生児をここに置くのですか」と私が聞きましたら、逆に向こうの方がびくりして、「ええ、でも人間は大昔からこうやって赤ちゃんを生んできたものなのです」と言われました。「なるほどなあ、かなわないなあ」と思いました。自主

的に家族計画を推進する彼ら、若いカップルはみんなとても生き生きとして、目が輝き、そのしなやかなたくましさ、まぶしいほどでした。そこは、お茶の名産地でした。村中の奥さんたちが心を



きし・けいこ 横浜市出身。映画「君の名は」「雪国」「おとうと」「細雪」など代表作多数。著書に「巴里の空はあかね雲」（日本文芸大賞エッセイ賞）『ペラルーシの林檎』（日本エッセイストクラブ賞）『砂の界へ』など。96年から国連人口基金親善大使。パリ在住。



こめて作ってくださったご馳走をいただき、おいしいお茶をたくさんいただき、当然トイレに行きたくなった。ちょっと尾籠な話で申しわけないのですが、畑の中へ案内してくださったトイレというのは、ただ四方に壁ができていて、天井がない。六畳ぐらいの地面に、壁から三〇センチぐらい離れたところにミゾが掘ってあるだけ。仕切りも何もないのです。

入ってみますと、そこには五、六人の女性が皆さん仲良く壁を向いて、お尻を出していらっしやるのです。やはり、ちょっとひるみましたね。私は砂漠やジャングル、サバンナでも、サソリが出るのではないかと思うようなところでも平気なのですが、一応ちゃんとトイレと書いてあるところに群をなして入り、銭湯のように仲良くおおらかに、というのはちょっと。(笑)

係の方が「皆さん、日本の方は一人じゃないとダメそうなので出てください」とおっしゃり、皆さん出てくださった。娘と二人でいましたので、皆さんは当然二人で一緒と思っただけなんです。が、娘は娘で待っているものだから、なんて不思議で不便な人たちでしょう、というわけで

す。そこにはもちろんチリ紙もないし、手を洗う水道もありませんでした。

そして、そこから出て来てちょっと横を見ましたら、花ゴザが敷いてあって、三十歳ぐらいの若い女性たちが五、六人で何かを揉んでいるのです。それが、その名産であるお茶だったのです。ということ、トイレに入ってそのまま紙も使わないで、手も洗わないで、こうしてお茶を揉んで、そしてそのお茶はすばらしくおいしくて。(笑)。地球の上では、さまざまな人たちが、さまざまな生き方をしているんですね。

○：「ママンは何も見なかった」

もう一つ。二年前のハノイでのことです。町はとてつもないエネルギーで沸き立っていました。戦争の爪跡など踏みしだいて、アオサイをひるがえし自転車のペダルを漕ぐ女たち。人気ない広野を駆け抜けるように驚進するバイク。その間をクラクションを鳴らし続けて反対車線に乗り入れたり、突如Uターンをする、まだそれほど多くはない自家用車やタクシー。北京や上海でもよく見かける風景ですが、この国ではちょっとちがう。無秩序、無防備の混乱状態のようにも見えますが、そうでもない。

池の鯉のような四輪自動車がヒレの向くまま気の向くまま、くねりと曲がると、金魚バイクやメダカ自転車、図体だけが大きく、でも、

覇者では決してない四輪車の気紛れに、従うでもなく、楯突くでもなく実に柔軟に、鯉をよけ、しなうような弧を描いてとどこおることなく流れてゆくのです。

なんという騒々しい整然さ、と息をのみました。

これが、ヴェトナム社会主義共和国なんだ、とうつすらと了解したものです。

そしてハノイ最後の日。信号機もない繁華街の四つ角で、縦横無尽にひしめき合う自転車の群の中を、私はどうしても一人で向こう側に歩きたいみたくなったのです。それを同伴しているNHKの人が撮りたいと言うので、かなり無謀な試みではありましたが、私は鯉をよけて、しなない泳ぐメダカさながら、卓越した運動神経ですすいと。そして渡りきれた！と、カメラの三メートル前まで来て、自讃の笑みに、にったりと顔をほころばせた途端、少年二人乗りの自転車と、がっぷり正面衝突をしてしまったのです。

「カメラがあるからこそその茶番劇よ。どうしてそんな無茶をするの。男の子たちのすまなそうな泣きべそを、ママンは見たの？」と、娘にひどく叱られました。

右足に軽い擦傷を受けただけなのに、国連やNHKの方が心配して駆け寄って来てくれたのですが、その人垣や自転車渋滞の間から、撮影班付き通訳のワインさんの面白そうに笑ってい

る顔が見えました。ヴィンさんは四十一歳、北ヴェトナム情報部の筋金入りの闘士だったそうです。仲間の大半はアメリカ兵によって殺害され、彼自身も何回か南に潜入して命を落としかけた。

その彼からみれば、たかが自転車とぶつかったぐらいで騒ぐなんぞ、娘の言う茶番劇以外の何ものでもないでしょう。彼はにっこりと笑ったまま、道ばたの箱にどっしりと坐っていて立ち上がることもしませんでした。立ち上がれないはずです。彼は磨いても決して光ることもないおんぼろ靴を投げ出して、物乞い同然の靴磨きの少年に、小銭を渡して靴を磨かせてあげているのでした。

私は胸の中に、ある小気味よささえ覚えしました。死を賭して修羅場をかくぐって生きのびた人ならではの、ゆとりを見た思いがしたのです。

そのヴィンさんは、仲間を殺したアメリカ人たちがさえも恨んではいないというのです。アメリカ兵たちも傷ついた。悪いのは戦争を起こす「国」や「政府」という怪物だ。

戦争が終わって二十一年。南北統一から二十年。貧しさを蹴散らし、中国やフランスや日本や、そしてあのヴェトナム戦争さえもう振りかえってはいられない。決して忘れはしないが、長いヴェトナムの歴史のなかで、抗米戦争—ヴェトナム人はそう呼びます。けだし当然です—

なんて、ほんのちっぽけなひとこまにしか過ぎない、とヴィンさんは言ったそうです。

私は親善大使でしたので、正式なところにはかり呼ばれて自由の中を歩けなかったのですが、娘は私の助手で行きましたので、自転車に乗っていろいろな裏町を歩きました。そして、こんなことを言いました。

「親善大使って、結局は公式訪問の政治家みたいにカメラや政府の要人に囲まれて、見えないものがたくさんあるんだ。ママンはヴェトナムの表を見、あたしは裏通りにまで踏み込む時間があったの」

そして娘は、ある有名なせりふをもじって私をからかいました。

「Tu n'as rien vu au Vietnam! (あなたはヴェトナムで何も見なかった)」

その昔、アラン・レネというフランスの監督が日本に来て作った「ヒロシマ・モナムール(広島わが愛)」（邦題「二十四時間の情事」）の中で、岡田英次扮する日本人青年が、フランス女性の恋人に、再三つぶやいたこの台詞がヨーロッパで大流行したことを映画ファンである娘は知っていたのです。それは映画のライトモチーフでした。

「Tu n'as rien vu à HIROSHIMA! (君は広島で何も見なかった)」

○：ファーストクラスは永田町ではない

今年はいりピンにまいりました。マニラで驚いたのは、貧富の差があまりにもひどいことです。私が行ったスラム街では、二万人の人たちの間に水道がたったの四箇所しかない。そこからちょっと車で行くと、日本でも見られないような大豪邸が並んでいる住宅街になるのです。

その貧富の差が、私にはとてもたまらなくて、ラモス大統領にお会いしたときに、「この貧富の差を、どうやってなくされるおつもりですか」とお聞きしたのです。すごい政治家だと思っただのは、すぐ机の上のボタンを押されて、若い人いっぱい資料を持ってこさせた。それはフィリピンの歴史とか、これからどういう政策をたてるかという資料だったので、「この次にここにいらっしゃるまでに、これを全部読んで勉強してきてください」と言われました。

それがなんかユーモアがあつて、カリスマ性があつて、「ああ大統領は、こんなふうだといいな」と私は思ったのです。やはり政治家という



ものについて、いろいろなことを考えました。ああいう人が日本に一人でもいてくれたらいいな、と思いました。

それにつけて、今回パリから帰って来たときに、ある航空会社のファーストクラスに乗ってきました。私は自前で払って乗っています。ファーストクラスというのはちょっと贅沢なのですが、追突事故で背骨を痛めていますので、これが唯一私が自分に許している贅沢なのです。

その航空会社に三十何年も乗っていますし、私は自分のお金で乗っているのです、大変いいお客様だと思って、一番前の席をいつもリクエストするので。ところが、そのときは大変偉い政治家がご乗りになっているので、うんと後ろの方に追いやられてしまいました。

もちろんそんなことはいいのですが、その方は大変有名な政治家でいらつしやるらしいのです。その方が窓際にいらして、その次に偉い方が反対の窓際にいらつしやる。その間を秘書のような方がウロウロ、ウロウロされる。ちょっとヘコヘコしながら右往左往なされるので、映画を見るのも、何を見るのもすごくじやまなのですね。「ちょっと頭を低くしてくれない」と言いなくなったのですが…。

飛行機のファーストクラスは永田町ではございません。せめて飛行機に乗ったときぐらいは、着替えをなさるのはトイレでやっていただきたいと思います。いろいろな人が乗っているわけ

ですから、人の目がありませんたら、ズルズルとズボンをお脱ぎになってアカバカのステテコなんかで、寝間着がなんかにおはきかえにならないでいただきたい、と私は思いました。

ことほどさように、日本の政治家ももう少し、政治的に才能があまりにならないのだとしたら、せめてなりふりぐらいはかまってほしい、と思います（笑）。

○：「ハーレムの希望」という名の青年

話題を変えまして、フランスという国に移り住んで、今年でちょうど四十年になります。正確に言えば四十一年。ですから、私は四十一年前の五月一日にフランス人として、そしてまたもちろん日本人として、二重国籍を持つ人間になったわけです。二つの国を持つということは、さまざまに複雑な問題があります。私の国はどこちなんだろう、私には国がないのではないかというような感じもしています。

しかも私は、いわゆる日本的な社会の規範に入っていない、たった一人で暮らしている人間ですから、そういう人間は日本では暮らしにくいかもしれません。フランスでも大変暮らしにくいのです。

けれども、だからといってしっかり生きていないわけではなく、ちゃんと自分の思うように生きています。でも、ひどくつらいのは「この



ごろ、あなた何をしているの」と聞かれることなのです。テレビに出なくても人間、生きる道すがらやることはたくさんあるのです。日本ではテレビに出ないともう終しまい（笑）。そんな感じがあるのが不思議です。

フランスという国も、気前よく国籍をくれるわけではありません。このボーダレスの時代に、西側先進諸国は、近隣の国からの不法労働者を制限するために、国籍法に関しては、一様にひどく厳しい改正をしています。

それはそれで、フランス人はさすがに人権を重んじる国ですから、デモ隊がものすごいんです。そういう人種差別反対とか、不法労働者を温かく迎えようという運動のリーダーになっている人の名前が、私はとてもすばらしいと思うのですが、ハーレム・デジュールというのです。デジュールというのはデザイヤールのこと。その人はマルチニック生まれなのですが、お父さんが黒人でハーレム生まれ。そしてハーレムでの迫害とか貧しさとか、小さいときに受けたいろいろな傷を忘れじ、という思いで、生まれた息子がハーレムという名前をつけたのです。お母さ

んはフランス人ですけれども。

そしてその名字が、デザインヤー。すごいと思
いませんか。これは本名なのです。このハーレ
ム・デザインヤー、つまり「ハーレムの希望」と
いう名前を掲げて、大変かつこうのよいチョコ
レート色の青年が、「おいらの仲間に出す
な」というスローガンの下に、人種差別をする
人たちに反対運動をする。今年は五月革命三十
周年記念の年でもありますので、いろいろなど
ころでデモがあるのです。そして彼らは、常に
そういうものを引っ張っている。やはり革命の
国だな、と思います。

そして今年も、日本におけるフランス年でも

辛いことも
悲しいことも
胸の奥に
息を吸って
泣いてみる
1998年8月10日

講演前に、貴賓室でサラサラとサインを

あります。ですから私は、四十一年間お世話に
なったフランスの、少しはいいところを、皆さ
んにお話したいと思います。

私がお伝えしたいのは、フランス人のもって
いるやさしさです。日本人もほかの国の人も皆
さん、フランス人をあまり好きではない。「パリ
というのは世界一美しい国だけれども、あれで
フランス人がいなければどんなにいいだろう」
とよく言われる。けれども、そのフランス人も
よく付き合ってみますと、なかなかいいところ
があります。インテリとか文化人とか、偉い人
たちの話は私にはしません。

○…今も続く「ハートのレストラン」

一人はコリューシユという人がいます。彼は
日本に例えれば、ビートたけしさんのような方
です。もう亡くなってしまったのですが、咄家
であり、俳優でもあった。ビートたけしさんと
ちよつと違うと思うのは、彼のターゲットは常
に政治家だった。政治家に対する毒舌というの
は、聞いていてもドキドキするほど面白いジョ
ークを飛ばす。そして決して憎めない人柄で、
ビートたけしさんと同じように、バイクが大変
好きなのです。ビートたけしさんはバイクでケ
ガをして生き返られたけれども、この人はバイ
クで本当に死んでしまった。

彼がやっていたのは、「ハートのレストラン」

ということですが。それは何かというと、寒くな
ってホームレスの人たちが食べていけなくな
ると、「ハートのレストラン」を各所に作る。自
分のお金をつぎ込んで、「ハートのレストラン」
を作り、食べられない人はそこに行つていつで
も食べられる。そして、そこに行くのがちよつ
と見栄があつてはずかしい人には、近所の人が
紙袋にいれて、持つて行つてあげる、という運
動なのです。

その紙袋が、またフランスだと思つたのですが、
何も書いていない。日本だったら、これはうち
が提供していますというようなコマーションが
入ると思つたのですが。

この運動は、彼が死んでからたぶん二十年ぐ
らい経つのですが、今だに続いている。そして
ボランティアの人たちが、みんな食事を作つて
あげる。これはフランス人のやさしさだと思つ
たのです。

もうひとつは、私が、ひどく身近ではほえま
しいと思う話です。私はサンルイ島というところ
に住んでいて、そこに変な有名な四天王一私
が勝手にそう呼んでいるのですが、四人のホー
ムレスのおじさんがいるのです。そのおじさん
の一人が、とても私になつてくれまして、い
つもセーヌの川べりにいるのです。

すぐお天気の良いある日、私は本を持って
背もたれのあるベンチで本を読んでいた。
そしたらそのおじさんがやつてきて、「マダム、

悪いけど、あんた隣のベンチに越してくれないか」と言うのです。「どうして、あなたがあっちに行けば」と言うと、「いやそうじゃないんだよ。このベンチは僕の三十五年以来の住まいなんだよ。僕はほかに行くところがないんだ。ここでブドウ酒を飲みたいのだ」と言うのです。私が「それではお相伴しましょう」ということで、お酢みたいなブドウ酒を一生懸命になって飲んで、自慢話をききました。

そのセーヌのちようど対岸に、アラブ研究所という大変にモダンな建物があります。ご存じだと思いますが、その建物は窓がレンズのようになっていて、陽が強くなると窓が閉まり、曇ってくるという、パリでも評判の建物なのです。そのおじさんはアラブ人でもないし、自分で建てたでもないのにそれがご自慢で、「あの建物はおれのおかげで建ったんだ」と言うのです。

なぜかと言いますと、僕はいつも、ここが住まいだからここにいて監督をしてあげていた。ちよつと変なことがあったら橋を渡って、すぐ飛んで行って、工事現場の監督に、自分が注文を出した。だからあんな立派な建物ができた。全部、僕がやったんだ。そして建ち終わったときに、アラブの王様が―彼に言わせると、お金持ちは全部王様―その王様には二十人ぐらいの美女がはべっている。その中の一番の美女、あなたが見て一番の女をあげましょう、と言われる



「いいじゃないの。もらったの」と言ったら、「いや、どれを見ても自分の好みに合わない。だいたいあんなにデブプリと太った―アラブの方は非常に太った女性が好きなので―美人がやって来たんじゃない、このベンチの家に入りきらない」(笑)。

そのおじさんは、物ごいはしないのですが、ちようどそのサンルイ島の真ん中に小さな銀行があるのです。その銀行からお金を引き出した人が通るところに、必ず日なたぼっこのごとくきちつと座っている。そして、なんとなく手を出す。するとみんながお金を入れていく。パッと目が合い私だと分かると、「ああ、冗談だよ、冗談だよ」と言って、すくはずかしがる。私もお金をあげるなんて失礼なことをしまいと思つて、クリスマスのときにブドウ酒を持っていてあげたり、お菓子を持っていてあげたり、大変な仲良しになりました。

その人たちの一人が、去年のお正月、元日に凍死したのです。それについて私は、「影をなくした男」というタイトルで朝日新聞の論壇に書

きました。零下何十度になると分かりきっていたのですから、施設の人が迎えにきて「どうぞ私たちの施設に入ってください」と言ったわけです。そしてそのおじさんは、「いや、ここは長年住み慣れた、私の住み家なので」と言ったんだそうです。彼は、施設の人があげた毛布にくるまって、翌日凍死していたのです。

そんなのを見るにつけ、フランス人って、まだまだ背骨がちゃんとしているな、と思つたのです。ホームレスに至るまで、と思うのです。これはいいのか悪いのか。ただ私は、そういう人たちがいるとほっとするような気がします。

○：パリであつた「奴隷制反対」デモ

先ほどお話しましたように、今フランスでは非常にたくさんさんのデモとか抗議運動が起こっています。皆さん信じられないとお思いでしょうが、最近「奴隷制反対デモ」というのがあつたのです。今この時代に「奴隷制反対」なんて何だろうと思つて、ニュースを聞きましたら、三十二、三歳のフィリピンだったかインドネシアの女性が、ある大使館に雇われまして、非常に酷使されていたのです。つまり、一日二十四時間のうち十七時間労働。しかも土日も祭日もなく働いている。でもそういう生活に慣れてきたから、決して不思議だと思わなかったということです。

ところがその人は、たまたまフランス語の読める人で、公園に子供たちを連れて遊びに行つたとき、くずかごの中に新聞が捨ててあつた。

それを読んだら、パリではパートの人は一時間六〇フランということが書いてあつた。六〇フラン（一五〇〇円）というのはちよつと高いのですが、本当のプロですから、日本のお手伝いさんが一日かかることを、二、三時間でやってくれる。ですので、その価値はあると思います。

彼女は一日十七時間働いて、一日の休みもなくて、月に二〇〇ドルしかもらっていない。「これはおかしい」と思ったけれども、どこに訴えていいかわからない。近所の人に話したら、その人たちが人権組合みたいなのところに申し出てくれた。これが大変な騒ぎになり、「奴隷制反対」というデモになったわけです。そして、そういうときには必ずハーレムの希望というハーレム・テジールも出てきて応援する。

私はフランスに住んで長いので、フランスの気風に染まってしまったのかもしれないのですが、人間として生まれて、人種差別にはものすごく胸の痛みを感じるのです。日本という国は島国ですし、沖縄以外は、敵に攻め入られて国土の中で血を流したことはありません。けれども、東欧の国々やアフリカなど、国境がどんどん崩れていく中の真ん中あたりでその様子を見ますと、やはり人間というものは平等でなければいけない、としみじみ思うのです。

○：アフリカへのオマージュ

十年ぐらい前に、フランス国营テレビで「ああアフリカ」という、六本のテレビドキュメンタリーがありました。その中に、セネガルのゴレ島にいまは残酷博物館として残っている昔の奴隷市の前で、一人の黒人青年が踊っている場面がありました。その歌が、震えるほどよかったです。その時はだれか分からなかったのですが、最近、私の番組に出てもらってびっくり。ユッスー・ンドゥールという、世界的に有名な歌手だったわけです。

ジーパンをはいて、真っ白なスカーフを風になびかせて踊りながら歌ったと言——「サトウキビのにおいがする、おれたちの甘い血を白人吸血鬼が吸いにきた」——このひと言に感銘して、拙書「砂の界へ」の中で、奴隷として売られて行ったアフリカの人たちへのオマージュを鎮魂詩として書きました。

その本はもう絶版になっていますので、宣伝ではごさいません。それを読ませていただいで、締めくくらせていただきたいと思えます。

人類さいしょの人間を大地に孕んだアフリカよ。ああ偉大で、ああかなしい奴隷産地のおれのアフリカ。

ブラック・アフリカには歴史がないなどと、

白い人間が与太をほざく。黒い肌のおれたちの有史以前からの惨劇は、歴史とよんでもらうには、あんたらの心が痛むとでもいうように。あんたらの『歴史』には、ファラオのミイラやピラミッド、黄金で飾った証拠が要る。おれたちの黄金や城跡は砂漠が喰ってしまったよ。灼けつく太陽と、けだものよりも恐ろしい砂嵐が、なにもかもなくすしに証拠湮滅につとめたのさ。その砂漠の魔物にも湮滅できるはずのない、おれらのかなしみと屈辱を忘れ去ってはいけません。

吸血鬼はみんな海からやって来た。甘くてやわらかいサトウキビの匂いのするおれらの血を、白人吸血鬼が吸いに来た。白いきれいな帆を立てて、ポルトガルや英国から、オランダやフランスから。泣いても叫んでも足かせ手かせの鎖や拷問。飢餓やマラリア、コレラやペスト。極悪非道なアラビアの、奴隷商人が大挙して、おれらを売って、倉建てた。

ああアフリカよ、ああナイルよ。この水がおれらを救いおれらを恵み、そしておわりにおれらを奴隷として白人社会へ連れ出す船を運んでいった。白いきれいな帆を張って船はナイルを下っていった。

どうもありがとうございました。ちなみに、私の次の国連のミッションは、奴隷産地であったアフリカです。

(文責・長谷川)

「何日か断りを続けましたが、結局、お引き受けしなければ、金融制度改革にかかわってきただ分の責任を果たせないと結論に達しました」

藤原作弥氏(時事通信OB)の日銀副総裁就任は、日本のジャーナリスト史に画期的な出来事として記憶されるであろう。その藤原氏を励ますジャーナリストの会が六月三十日夕、宴会場で開かれ、日銀、大蔵省、金融界の関係者も駆けつけた。数十人の出席者の前に、藤原氏はいつものさわやかな笑顔を絶やさなかったが、苦渋の選択に至るまでの心境を切々と語った。

今回の人事の仕掛け人とみられる三重野日銀・元総裁はにこやかにいさつに耳を傾けていた。マスコミからは日経の杉田専務が激励の言葉を贈った。来賓では橋本富士銀行会長が

Party

「ひと山を越えたと思ったら、まだ山があった」と、不良債権との苦闘を率直に語った。
金融界からは、伊夫伎三菱銀行

藤原作弥さんを励ます会

相談役、末松さくら銀行相談役、相田野村証券・元会長らも参加した。大蔵省たたき以来、公の席にあまり姿を見せることのない斎藤次郎・元大蔵省次官が姿を見せ、藤原氏人脈の広さをうかがわせた。斎藤氏はあいさつで「このような金融危機のために育ててきたはずの福井・前副総裁が(日銀総裁として)カムバックすることを願う」と語り、会場は一瞬、静まり返った。

「大蔵省は胃かいよう、日銀は肝硬変」(某氏)の中で、藤原氏の健闘が期待される。

読売新聞調査研究本部長

中村 仁



藤原さん(左から2人目)と、右から金融記者室の鈴木さん、NHKOBの成田さん、毎日の玉置さん

六月二十九日、十階ホールで、産経新聞政治部長、フジテレビ報道局長、さらには日本記者クラブ副理事長などを務め、昨年七月二日亡くなった吉村克巳氏を偲ぶ会が開かれた。吉村氏が第一線の政治記者として活躍したのは昭和二十年代から四十年代前半。海老沢勝二NHK会長が「僕がNHKの政治部にきたころには、すでに産経の政治部長だった」というほど、政治記者の間で交友の幅は広く、会場はさながら各社の政治部OB会のような趣となった。

ちようど参院選がスタートした直後でもあり、会場のあちこちでは、政治状況や選挙見通しなどをめぐって話に花が咲いた。どのグループの政治談義も最後は「吉さんなら何と言うだろうか」という結論に行き着いたようである。「先読みの吉村」といわれた故人に「できることならもう一度政局観を聞きたい」という声が聞かれた。

参院選のさなかにもかかわらず、政界からは「偲ぶ会」の発起人も務めた宮沢喜一元首相や

吉村克巳氏を偲ぶ会



千枝子夫人(左)を囲む、水野氏、清原産経社長、宮沢氏、海老沢氏と三木元首相夫人(右から)

水野誠一参院議員らが出席、三木武夫元首相の睦子夫人は「自分からは大きな声を出さないのに、座の中では重んじられていた」と故人を振り返っていた。

毎夜のように他社の記者でもかまわず自宅に連れて帰った、という伝説が事実であることを物語るように、千枝子夫人はほとんどの参加者とは顔なじみ。「古きよき時代の政治記者」とその生活がどういったものだったかがしのばれる一夜だった。

産経新聞編集総務 木立 真行



◇個人D会員（五十音順）

プロフィール

七月一日付入会の個人D会員、
法人・個人賛助会員の方々です。

■ 会議報告 ■

第194回会報委員会

(7・10 大会議室)

七月号について意見交換したあと、八月号、九月号の編集を協議した。

出席 久保、秋山、伊波、埜邑、和田、塚越の各委員。

第251回会員資格委員会

(7・16 大会議室)

松崎新委員長のあいさつの後、委員交代(毎日・北村正任氏から中村啓三論説副委員長、新聞協会・村上重美氏から佐藤嘉男事務局次長兼国際部長)を報告。八月一日付の入退会を審議し、理事会に答申した。

出席 松崎委員長、中村、古川、伊藤、佐藤の各委員。

第307回理事会(書面)

- 一、故江尻進会員の遺族からと、「藤原作弥日銀副総裁を励ます会」からの寄付をそれぞれクラブ賞基金へ繰り入れることを了承した。
- 一、別掲の役員の一部交代を承認した。
- 一、八月一日付の入退会を承認した。

○ 囲碁の会 ● 七月二十五日(土)
紅友会と交流試合



夏の恒例行事となったアツイ戦い

紅友会との親善対抗試合も今回で五回目。過去最高の二十五人の女性軍を迎え、にぎやかな一日を過ごしました。

成績は四六勝二九敗とわが烏鷺鳥鷺会が大きく勝ち越し、通算成績を一六六勝一三九敗としました。

勝利に大きく貢献したのは三勝〇敗の松本昭男、日比野和幸の両氏をはじめ、江口浩、浅野道彦、大日向一郎、佐伯晋、竹尾新吾、西山武典のみなさんでした。

なお、八月の例会は「夏休み」といたします。

△ 理事交代 △

時事通信社

(新) 榎原 潤 取締役業務・事業・

(旧) 長谷川和明 マスメディア担当

日本新聞協会

(新) 村上重美 事務局長

(旧) 浅野 修

△ 法人会員代表変更 △

日本新聞協会

(新) 村上重美 事務局長

(旧) 浅野 修

福島テレビ

(新) 友田 昇 代表取締役社長

(旧) 佐久間芳夫

テレビ神奈川

(新) 石井 明 代表取締役社長

(旧) 吉田次郎

静岡放送

(新) 五條朝男 常務取締役編成

(旧) 深澤 渉 局長

写真郎

写真 荒井 聡

(1989年朝日新聞入社 大阪写真部を経て 名古屋本社写真部)



早朝から総選挙の投票所に有権者が
つめかけた (7.26 カンダール州)

パンドラの箱

カンボジアのことになると、どうも情緒不安定気味になるところがある。三十歳代初めの二年間をシアヌーク時代末期のカンボジアで暮らした。当時のプノンペンは大マリンドの並木が茂り、時がゆったりと流れる、清潔で静かな街だった。

眠気を誘うあの物憂げな空気は、いまでは世界のどこへ行っても味わえないかもしれない。一年を過ごした最初の任地ベトナムとは、隣国なのに全く違っていた。何よりも平和だった。しかし退屈だった。

それがある日を境に一変する。その後は思い出したいくないことばかりが増えてくる。カンボジア人の穏やかな表情の裏に隠されていた野性の不気味さを思い知らされた。そして帰ってこなかった記者、カメラマンたち。

ボル・ポト派による大虐殺、ベトナム軍の侵入へと続く、カンボジアの悲劇の時代の始まりだった。

平和な見せかけの下に隠されていたもろもろの災厄が、あのクーデターで一度に噴き出したのだと、何年かたってから思い至った。国家存立の基盤に危うさを抱えているカンボジアの姿がそこに浮かび上がっていた。

この写真から感じられる明るさは、私にはパンドラの箱に最後に残っていた「希望」のように見える。

(秋山 民雄)

改修工事は八月末で終了します

リノベーションのため、会員の皆さんに大変ご不便をおかけしています。工事は予定通りに進んでいますが、八月末まで、開室時間は午前十時から午後六時です。九月一日には新装なって再スタートします。もうしばらくご協力願います。

「会報アンケート」

ご協力ありがとうございました

七月号会報で実施した「会報アンケート」にご協力いただきありがとうございます。アンケートの結果と記念品当選者は九月号に掲載します。

女性用の記念品をつくりました

クラブのロゴを刺繍したハンカチセットを、女性ゲスト用の記念品としてつくりました。銀座和光の特製で、七千円で会員の方にも販売いたします。ポケットチーフとしても利用できますので、受付でご覧のうえお求めください。

招待券

朝日新聞社から「世界報道写真展」、大丸ミュージアムから「ジャガール展」
「夢おいかけて 絵手紙二人展」、中川雅裕会員から「なら平城京展'98」の招待券をご恵贈いただきました。お礼申しあげます。

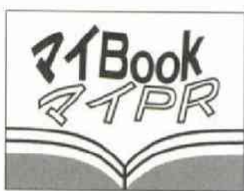
『台湾ロビー』

本澤二郎 (個人D会員 東京タイムズOB)

ソ連崩壊後になぜ日米安保・日米防衛協力の強化なのか。こんな素朴な疑問が永田町と霞が関を、改めて分析させる原動力となったといえます。それは憲法の平和主義への挑戦でもあったわけですから、昨年、『改憲陰謀』を執筆し、今回の『台湾ロビー』(いずれもデータハウス刊)につながった次第です。

米国ではユダヤロビーに次ぐ勢力ですが、わが日本ではナンバーワンというのが、取材した実感です。金で動く日本政治を象徴しています。

(データハウス 一、五〇〇円)



天才には歯がたたないものとは承知していた。だが、いかに「天下のタイムズ」とはいえ、ある時期の一編集長の力量にすら遠く及ばぬ自分の才能の乏しさを悟ったのは、まことにつらく、いまましい。なにとぞ、乞う御一読。

(みすず書房 一、七〇〇円)

著・訳書のワンポイントPRをどうぞ！

会員の皆さんの新刊書をご紹介します。自著の内容や狙いを、二〇〇字程度でおまとめいただき、事務局の本庄までお送りください。

訃報

左記の方々が死去されました。謹んでご冥福をお祈りいたします。

野田衛会員 (産経新聞OB・67歳) 〓七月四日腎不全のため。安藤枯生会員 (読売新聞OB・82歳) 〓同二十一日、肺気しゆのため。熊谷光平会員 (札幌テレビ放送常務・61歳) 〓同二十六日、肺がんのため。木下健二会員 (共同通信OB・73歳) 〓同二十七日、多臓器不全のため。

会員現況 法人会員 一四九社 基本会員 八一六人 個人会員 一、八四八人 法人・個人賛助会員 五六社 一八一人 特別賛助会員 五二人 名誉・功労会員 一五人

計 二〇五社 二、九二二人

会報委員会

委員長 〓住田良能
委員 〓久保伸太郎 秋山民雄 伊波新之助
椋邑義道 和田千年 塚越喜昭
連絡 〓長谷川和子 本庄五月
(電話) 〇三―三五〇三―二七二二
(FAX) 〇三―三五〇三―七二七二